



木 木

千葉県TEACCHプログラム研究会
2015年7月18日（土） 第78号

「森」題字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行:千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部

HP: <http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm> 事務局:千葉県発達障害者支援センター TEL 043-227-8557

「発達障害の子どもや人々に、私たちができること — それぞれの長所を見つけて生かす —」

佐々木 正美 先生 (ぶどうの木・川崎医療福祉大学)



(1) それぞれの長所を見つけて

①どうやって見つける？

この子は、どういう能力をもっているか、どういう長所を持っているかということを、一生懸命考えていただきたい。見つからなかったら、自然な状態にこの子がおかれていた時に、好きなこと、できることをやりますから、「何をどのようにしたがるか。」ということのなかに、ヒントを見つけていただきたい。こちらが「こうなってもらいたい」というところを全く白書の状態で、発達障害の方たちに注意力を向けていろいろ考えてみるのがよい。

②どんなところ？ = 「興味や関心、認識の対象が狭いけれども、強い」特性の理解

「この子には、こういういいところがある。」「こういうところが素晴らしい。」「こういうところを伸ばしてやりたい。」と思えるところを見つけていきたい。視覚的なところが強い、具体的なところが強い、「こうであれば必ずこう」という個別的なことが強い、視覚的に目で見て了解することが強い、法則感ははっきりしているものであればほぼ強い、などの優れた特性がある。例えば、パソコンやCGのような目で見る映像の世界は、テクニック（技術）がはっきりしており、どうすればどうなるということがわかりやすいので、この子たちに合っていることが多い。

(2) 生かす

①支援者の方から、発達障害の世界に入っていく。すべてのことはそれから

相手に合わせるというところが主力で、こちらに合わせるというようなところは、控えめに考えたい。そのような姿勢が、発達障害の人たちを支援する人、教育する人には、必要。その方が望んで、喜んで取り組める活動を、社会的な評価が得られるように向けてあげるために、その方の能力と資質に合わせて、こちらが何をどのように提供していくか、という発想で育てていきたい。

②その子に合わせた環境を作る

この子たちが生きやすいように、この子たちが学びやすいように。好きなんだから好きなようにやっている時間をより多く取ってあげられるように。

③子どもに劣等感情を感じさせないように

強いところをどれくらい伸ばせたか、ということが社会に出て生きてくる。だからこそ、得意なことがあつたら、無理をさせないで、手伝ってあげていただきたい。『できなくたっていいんだよ』『何も変えるところはない』『あなたはあなたのままでいい』と言ってあげてほしい。

☆ 発達障害のまま、健康に幸福に生きて行こう ☆

「発達障害は、決して軽くなりません。まして消えるということはないです。」佐々木先生は、お話の中で繰り返されました。だからこそ、発達障害の方がその特性をもったまま、健康に幸福に生きていくことができる道を、支援者である私たちが、探し当てて応援してあげたいです。それが「私たちができること」つまり、「それぞれの長所を見つけて生かす」ということなのだと思います。佐々木先生が強くおっしゃっていたようにこの子たちの個性・特性を理解し、受容して、そして、そのまま、健康に幸福に生きていくことができる生き方を、考え、道しるべになりたいと願いつつ、帰路につきました。

（文責：岡村）



佐々木先生



& 安倍先生



Q&Aコーナー



集団への参加が難しいことから支援学級に通う中1男子の母です。担任は、子どもを理解して合わせようという姿勢ではなく、自分の言うことを聞かせようとするのです…。



学校は楽しく通うところ。そうでないと、子ども自身がつらい。子どもの苦労を考えて生徒に合った教師になれるように努力してほしい。それができることが専門家ではないでしょうか。



自閉症スペクトラムの理解は難しい。先生にも自分の子どもの特徴をしっかり伝えたいですね。ASDの特性理解も含めて、学校の先生をサポートする仕組みや、先生方にわかつてもらうための自閉症協会等との連携した働きかけも必要だと思います。



保育士間でも、「寄り添う」とこと「言いなりになる」ことの境目の曖昧さや、「甘やかす」こととの混同があり、共通理解が難しいです。また、たいへん疲れているように見えるお母さんに、母子で過ごす時間の大切さを伝えるにはどうしたらいいでしょうか。



「寄り添う」ということは、「相手にできるだけ合った方法で教育をする」ことで、そのために、教育のチームは何をどう考えるか…ということです。レベルや配慮を含めて、どのような教育をどのように行うか。教師だけでは難しいので、近接領域の専門家で協働してチームで取り組むといいと思います。

母子通園か、保育園か、どちらがいいとは一概には言えません。どの状態の時がこの子にとって一番いい状態かを考えていきたい。「この子のために」と「お母さんのために」のバランスで、保護者もいろんな程度に安らぎを得ながら、どのスタイルを選ばれてもいいと思います。



小さいうちは切り替えが難しいことが多い。その子がわかるように、どう伝えるか。教育的な配慮の中で、いかに参加するか、方法を考えていくのが、支援であると思います。

特に早期養育の2～3歳から学校に行くまでのところで、親御さんがお子さんの特性を理解し、そこにどう支援していくといいたいのかということを学べるように、先生たちがモデルを示すことができるか、提供していくけるか、話し合っていけるかが、専門性です。親御さんと連携して早期療育をしていってください。



年下の子を殴ったり、職員に噛みついたりする小4の男の子。周りの友だちも嫌がっている。どうしたらいいでしょうか？

施設の利用者さんで、居室内での放尿行為に対して、厳しい指導を求めてくる家庭と、どのように関係作りをしていったらいいでしょうか？

20歳の重い自閉症の息子。最近、細かいことを気にしている様子。しおちゅうチェックをしています。何が気になっているのかさっぱりわかりません…。



「しなくともいいことなのにしないと気が済まない」このような行動を強迫行為と言います。禁止すると余計にひどくなる。禁止強制的な発想が慢性的に続いている、その子がしてほしがっていることをしてあげ足りていなかったり、したくないのにさせられたりして、精神心理的なストレスがかかっている部分かもしれません。厳しく叱ってもマイナスにしかなりません。「この子の意見を聞いてあげよう」という発想をもってほしいと思います。

絶対に子どもをぶってはいけません。その子どもは自分より弱い子の前に行ったら、同じことをするでしょう。攻撃という習慣は、自分の欲求が十分に受け容れられなくて、満たされなくて、自分が望まない相手の要求を強く押し付けられた結果であり、ついてしまうとなかなか消えにくい。子どもに選ばせてあげて希望を受け入れてもらう機会を一定程度経験していくないと、攻撃的な感情は消えていきません。



TEACCHには、「氷山モデル」という考え方があります。大変な行動に目を奪われがちになりますが、なぜそういう風になるのか、特性を理解する等の氷山の下の事柄から、問題となる行動の方略を考えていこうという考え方です。



『TTAP』 講習会

特定非営利活動法人自閉症・サービス理事長 中山 清司 氏

青年期・成人期の自閉症スペクトラム障害の人の特性に合わせた検査である TTAP についてお話し下さいました。TTAP の検査は、苦手なことを明らかにするのではなく、得意なこと、強みを見いだすために行うものであり、検査でわかったことを、日常生活や地域生活に活かすことが大切であるとお話し下さいました。

午前中は、TTAP について基本的な知識を講義で学びました。そして、千葉 TEACCH ならではの実践セミナー、実際に受講生が協力者に検査を実施しました。(みなさん、緊張されていました。)

フォーマルアセスメント 6 つの領域 (①職業スキル②職業行動③自立機能④余暇スキル⑤機能的コミュニケーション⑥対人行動) と 12 項目をグループごとに担当を決め、グループごとに担当領域の検査を受講生同士で練習した後、実際に協力者への検査を実施しました。慣れないときには検査をすることで精一杯になってしまいけれど、被検者の表情やしぐさからとても重要なことがわかるので、逃さず見ることが大切であると教えていただきました。また、検査者が言葉で説明しすぎないようにも注意されました。

各検査項目は、合格、芽生え、不合格で評価します。検査後、担当グループで各々がつけた評価を見直し、発表しました。そこで評価が違ったことに重点を置くのではなく、なぜ、その評価をしたのか、根拠となる行動をきちんと説明できることが支援者として必要なことだと話されました。とくに機能的コミュニケーションや対人行動の領域では、被検者の年齢の一般的な行動を指標にして評価するとよいとのことでした。(今回 A さんは、20 歳でしたので、20 歳の一般女性と比較して対人面やコミュニケーションの検査項目の評価はどうかと考えます。)

検査しっぱなしは、ダメ。今後の具体的な支援方法を！

評価後、グループごとに今後の目標と具体的な支援方法(手立て)を家庭と家庭外の地域や職場に分けて目標をたてました。そこで重要なのは、検査の結果からどんなことが得意でどんな方法であれば理解が促されるのかを明確にすることです。A さん



グループごとに評価を発表

は、視覚的な支援で理解が促されることが検査結果からわかったので、

簡単な文字によるスケジュールで終わりがわかるようにしたり、コミュニケーションを促すためのリマインダー(場面をあらかじめ設定し、方法やルールを視覚的に提示し、本人が意識できるようする)を準備したりするなどの具体的な手立てが出されました。この結果を受けて、今回参加している A さんの通っている事業所の職員の方は、「実際に職場でもこの講習会で学んだことをいかしていきたい」と心強い言葉をいただきました。



A さんと検査

是非みなさんも現場で TTAP を実施していただき、支援に役立てていただきたいと思います。

私もこの講習会で実施した直接観察尺度と保護者による家庭観察尺度、参加いただいた事業所の職員による事業所尺度の結果を解釈し、具体的な支援方法を報告書にまとめたいと思います。今後もみなさん、一緒に学んでいきましょう！

スタッフ紹介 & みずほ学園の実践紹介

広報「森」をご覧の皆様、初めまして。今年度より運営委員として、参加させていただいております。みずほ学園の山中 譲です。よろしくお願ひします。参加させていただきました経緯としましては、同じみずほ学園所属の遠藤さんに誘ってもらったのが始まりでした。研究会に参加させていただいて強く感じたことは、会員の皆様、役員の先輩方の知識の深さとエネルギー、13年間の連携力に驚きました。TEACCHプログラムの哲学に初めて深く触れることが出来て、感銘を受けると同時に私もここで何かを吸収したいと思いました。まだまだ未熟な自分で、会員の皆様、役員の方にご迷惑をかけてしまうことがあるかも知れませんが、少しでもお力になれるように頑張っていきます。身長185センチ、体重100キロとデカイため、覚えてもらいやすいのが自分の強みと思っております。見かけた際にはお気軽にお声掛け、ご指導おねがいします。



私の所属する施設「みずほ学園」の紹介をさせて頂きます。初めての原稿でこんな広大なスペースを頂き、精神的に若干追い詰められていますが、負けずに紹介させて頂きます。私の所属するみずほ学園は勝浦市にあります。海の印象が強い勝浦市ですが、標高の高い「こんた地区」に施設は位置し、夏の暑さは豊かな森の木々で軽減され、津波の心配もない、房総の軽井沢と呼ぶ方もいらっしゃるほどの気候の快適さです。事業内容としましては、施設入所支援(58名)、生活介護(定員72名)、短期入所事業(定員4名)、日中一時支援事業(勝浦市、鴨川市、いすみ市、御宿町、大多喜町委託)、共同生活援助事業(定員6名)、特定相談支援事業(勝浦市指定)となります。施設として本格的にTEACCHプログラムを勉強し始めて、5年目となります。施設での研修(講師、コンサルタントを迎えた研修、利用者様の事例研究など)の内容も頻度も充実しております。設立からの学園のモットーである『よく働き、よく遊ぶ』を利用者の皆様が実現できるよう、支援員一同レベルアップを目指して勉強している途中です。以上で施設紹介とさせて頂きます。外房へお越しの際はお気軽に越しください。



施設ホームページ <http://mizuhogakuen.or.jp>

山中 譲

平成27年度 TEACCHプログラム研究会 第3回連続セミナーのお知らせ

日時 9月27日（日）13：30～16：30

内容 「教育現場での視覚支援の取り組み」（課題）

講師 佐藤真吾氏（長野県長野養護学校）

会場 きぼーる内 千葉市ビジネス支援センター会議室1・2・3

(編集後記) 今年度4月より勤務先を異動した私にとって、TEACCHプログラム研究会がとても新鮮に思えます。理由は、就職を目指した高等特別支援学校の生徒に対してこれまでの支援方法とは違う工夫が必要とされているからです。軽度知的障がいを併せ持つ自閉症スペクトラムの生徒に対する支援方法をイメージしながら学んでいます。この夏は、ソーシャルストーリーやコミック会話を改めて学び直し、実践できるようにしたいと思っています。皆さんの夏はいかがでしょうか。（吉村）